学習指導計画

<table>
<tr><td>教科(科目)</td><td>国語（現代文B）</td><td>授業者</td><td>福田　亜里沙</td></tr>
<tr><td>日時</td><td>平成３０年　９月　２５日（火）第４限</td><td>対象・場所</td><td>２年４組教室</td></tr>
<tr><td>単元
本時の位置</td><td colspan="3">複数の観点を生かして今後の本の在り方について意見を深めよう
(『おじいさんのランプ』と『読み書きする身体』のペアリテリングを通して)
全　６時間中の　４時間目</td></tr>
<tr><td>本
時
の
過
程</td><td colspan="3">（本時までの流れ）
前時までのところで、ワークシートⅠを用いて、比較評論ＡとＢのペアリテリングを行った（１時間目）後、Ａ・Ｂそれぞれエキスパート班に分かれ、比較評論の主題を発表させた（２時間目、主題の共有）。その後ワークシートⅡを用いてジグソー活動を行い、２時間目で話し合った筆者の主張（主題）やそれに対する個人の意見を共有する（３時間目）。
本時は前時に引き続きジグソー班で集まっている。ジグソー班というのは評論Ａ、Ｂどちらかを中心に読んだ生徒たちが半数ずつほどに集まっている班である。それぞれの意見を交流させながら、本時では、「今後の本の在り方」について意見を考え、ワークシートⅢにある発表原稿づくりに取り組んだ。

１　（個人の活動）教員の指示を聞く。（３分）
２　（個人の活動）ワークシートⅡの後半にある「今後の本の在り方」について
自分の意見を記述する。（１０分）
その際、比較評論に沿った主張の問題点を解決できるように書く。
（例：今後本はどのような媒体にのせられるのが望ましいか、
本がかつて担ってきた役割をどのように更新するか等）
３　（グループの活動）班活動は４名から５名で８班。
比較評論ＡやＢを踏まえて、具体的に本の在り方は
今後どのようであるべきか意見を交流する。（１５分）
４　（個人の活動）友だちの意見をメモしたり、班で広がった意見を手がかりに、
再度自分の意見を記述したりする。（５分）
（３，グループの活動と並行して）
５　（グループの活動）次時の発表会に向けて役割分担を決め、
ワークシートⅢの発表原稿を作成する。（１２分）
※その際、発言は全員が必ず行うこと、
直前に発表した班の感想を３０秒程度で一名が発表すること、
発表する際、本文の根拠を示すことを指示した。
６　（個人の活動）教員の指示を聞く。次時の発表順を決めた。（５分）</td></tr>
<tr><td>反
省</td><td colspan="3">一学期に評論文の読解の基礎を養成してきたため、その力を活用し定着を図るために今回の授業を行った。また、本文の読解のみならず、自己の主張をもち、複数の観点から多面的に物事を捉える能力を養うことは、二学期後半から学習する小論文記述にも役立つと考えた。今回の教材は、話題が「本」についてであり、生徒にとっても季節感があり身近である。話題が同一の教材を続けて教員主導で読み解いていくよりも、生徒自らが言語を用い、協働的な学習を通して内容を説明しあうことによって、効果的に内容読解を深めることができるのではないかと考えた。
反省としては、ペアリテリングや主題紹介、エキスパート活動についてはおおむね基準を満たす学習活動であったが、発表時の課題の設定が悪く、どの班も「電子媒体と紙媒体の本の共存」という意見が大半を占めた。発問を仮に「絵本」や「教科書」など具体に絞れば多様な意見を導けたかもしれない。それでも具体例を班独自に考えようとする姿勢はよかった。ルーブリックについては毎度苦労しているのだが、生徒も教員も効果的に活用できていなかったように思う。文言が曖昧だとやはりうまくいかない。例えば適切に論理のつながりを導くよう、接続詞を指定してもよかったかもしれない。
良かった点としては、この学年で班活動を行うのは初めてであったが、活発に取り組んでいた。授業の初めに多面的に物事を捉えるというねらいも伝えていたため、そのねらいに向かっていく姿勢や手応えは感じられた。</td></tr>
</table>

ワークシートⅠ　　２年（　　）組（　　）番（　　）

自分が読んだ本文　（　おじいさんのランプ　・　読み書きする身体　）↑○をつける。

おじいさんのランプ
ＭＥＭＯ

※リテリングの評価をします。「話し手」「聞き手」それぞれの欄に○△×を記入して評価しよう。

聞

話し手は（　　）さん。本文は【　おじラン　・　読み書き～　】です。
本文の内容はわかりましたか？【　　】聞き取りやすい話し方でしたか？【　　】

話

自己評価になります。
本文の内容は理解できましたか？【　　】それを相手に伝えられましたか？【　　】

要旨

見出しをつくろう！

筆者の考えについて、あなたの意見・感想を書きなさい。

読み書きする身体
ＭＥＭＯ

※リテリングの評価をします。「話し手」「聞き手」それぞれの欄に○△×を記入して評価しよう。

聞

話し手は（　　）さん。作品は【　おじラン　・　読み書き～　】です。
本文の内容はわかりましたか？【　　】聞き取りやすい話し方でしたか？【　　】

話

自己評価になります。
本文の内容は理解できましたか？【　　】それを相手に伝えられましたか？【　　】

要旨

見出しをつくろう！

筆者の考えについて、あなたの意見・感想を書きなさい。

本日の振り返り

比較評論A

おじいさんのランプ

宇野常寛

今更強調することでもありませんが、現在僕たちを取り巻くメディア環境は大きく変化しつつあります。もちろん、新しい技術は必ず新しい問題を引き起こす。淘汰されゆくものだけが持つ良さもあるでしょう。しかし僕は実のところ「電子書籍の波がやってきた後も残るであろう紙の本の良さ」とか「インターネット時代にも残るマスメディアの役割」といった「いい話」に、心のどこかで冷淡になってしまうところがあります。

もちろんこういった「いい話」は正しい。だがその正しさは、何かもっと本質的なことを隠蔽するために必要以上に強調されているように思えます。

実はこの種の問題を語る時に引用される童話があります。それは新美南吉の童話『おじいさんのランプ』です。これは日露戦争の頃、農村にランプを普及させて成功した男の物語です。ある日、村に電気を引くことが決まり、主人公の営むランプ屋は存亡の危機に立たされます。行政を逆恨みした主人公はなんと区長の家への放火を試みるのですが、その時火打ち石でなかなか着火することができず、焦って独りごちるのです。マッチを持ってくればよかった、火打ち石のような古いものはいざという時に役に立たない、と。そしてここで主人公ははっとします。古いものはいざという時に役に立たない――自分が間違っていたことに気づいた彼は、泣きながら在庫のランプを自らの手で割って、廃業を決意することになります。

そして、僕の考えるこの童話の白眉はそのエピローグです。時は下り昭和十年代、ランプ屋を辞めて街で本屋を営むようになった主人公はその孫に自分の体験を語ります。このエピローグから浮かび上がってくるのは新美の「知」への信頼です。主人公がランプ屋を廃業した後、本屋になったのは、恐らくどんなに時代が移ろって、ランプが電球になり電球が蛍光灯になったとしても、言葉を通して知を共有する文化は変わることがないという確信があったからだと思います。

新美のこの確信を僕は支持したい。しかし新美が強く信じていた文化のかたち、つまり人間と知（を伝達する情報）との関係は、彼が想像したであろうものよりも圧倒的に速く、そして決定的に変化しています。もちろん古いメディアの役割は今すぐゼロにはならない。しかし少なくとも「このまま」ではいられない。そして「旧メディアだからこそできることがあるんだよ。」といった「いい話」たちの何割かは確実に、この現実から目を背けるためにささやかれている。だとすれば、そんな「正しい」話たちは別の次元では害悪としてしか機能しないでしょう。

エピローグで更に彼は告白します。実は電気が村に通った後も、ランプの需要そのものは決定的にはなくならず、続けようと思えばランプ屋は継続できたのだ、と。しかし、それでも彼は廃業した。なぜか。それはランプが彼にとって文明開化の象徴だったからです。だからこそ彼はランプが時代を象徴する力を失うと同時に廃業したのです。そして僕は思います。時代を切り開き、本当の意味で文化を守り育てるのはこうした知性にほかならない、と。

前述の通り、この『おじいさんのランプ』は電子書籍をめぐる議論で引き合いに出される童話です。しかし僕はこの童話で描かれているような、技術革新がもたらす社会の変革は今、日本の文字文化についてはより本質的なレベルで進行していると考えています。それは紙の本がなくなって電子書籍に取って代わられる、という表面的なレベルの変化ではない。

例えば今流通している日本語の、いわゆる「四六判（約一三〇×一八八ミリメートルサイズ）」の本はどういうものかというと、一冊一〇～一五万字を、大体約一万字の章に分けて読ませているものです。一文の文字数は大体一〇～二〇字くらいでできていますが、実のところこの形式と規模はほとんどなんの合理性もなく決まっているものです。この日本語の散文の形式は恐らく、明治期の知識人が外国語の翻訳作業を通して現在の日本語を形作っていった頃にその原型が生まれ、その後の出版事情の変化の中でマイナーチェンジを繰り返してきたものだと思われます。そして、現在のこの日本語の本と散文の形式を定めているのは、出版社の制作コストや書店での陳列ルールの慣習です。こうしたものを基準に本の大きさやページ数、ひいては文章量やその区切り方が決まっている。これが意味するところは何かというと、前述の日本語の形式は特に人間が生理的に理解しやすい形式でもなければ、リズムでもなければ、分量でもない、ということだと思います。少なくとも、そのために最適化されてきたものではない。

例えば短文投稿のSNSでフォロー数が百人くらいの人は、ほぼタイムラインの投稿を全部読んでいることが多いはずです。仮に一人一日二回つぶやいたとした場合、一日にこれを全部読むと最大二万八〇〇〇字になる。こうして考えてみると活字離れなんてうそで、日本人は三日か四日で一冊分くらいの活字を読んでいることになる。もちろん、同じ書き言葉でもソーシャルメディアの言葉と本の言葉は全く違う。けれど、今の日本語の本で支配的な散文の形式やその切り分け方が、人間に文字情報を通じて何かを伝える時にどれくらい適しているか考え直さないといけない時期に来ているのは間違いない、と僕は思います。なぜならば、技術的にそれが可能になっているからです。それは出版文化だけではなく、僕たちの書き言葉によるコミュニケーションや教育すら変えうるものでしょう。

単純に考えて、ここ十年余りの情報化の進行は人間と言葉との関係を大きく書き換えています。デジタル化で「紙の本」というものの存在意義が大きく揺らいでいるのはもちろんのことですが、僕はもっと本質的な変化が現代には起こっていると考えています。

有史以来、人間がここまで日常的に書き言葉でコミュニケーションを取っている時代はない。例えば僕たちは携帯のメールなどで連絡を取り合い、ブログやＳＮＳなどに日々の雑感を記している。この一点をもってしても、現代における情報化の進行は人類の文化そのものを大きく変化させようとしているはずです。僕たちは言葉というものとの関わり方自体をいやおうなく問い直す時代に生きていて、その大きな変化のあくまで一部分として本や雑誌の問題がある、と考えたほうがいい。

その意味では、これまでの本は「本という形式が得意とする領域」以上の役割を負わされていたと思います。例えば知識や技術の伝達、政治的主張、宗教の布教活動、共同体の神話や物語の保存など、これまでの本は多くの役割を担ってきました。そうした目的で、人間が他者のまとまった考えに文字情報で接することを求めた場合、長い間本を読むということ以外に手段がなかった。しかし現在は本を読むこと以外に、情報に触れるための回路がたくさん登場していて、必然的に本それ自体が機能面を含めた更新を迫られている。するとこれまでの形式の本というのは、本という形式を愛する趣味人のための骨董品のようなものになっていく可能性が高い。しかし、かつて本が担っていた快楽や人に与える知的興奮、社会的な効果などは必要とされることに変わりはない。人間と情報の関係が大きく書き換えられてしまった今、どのようなものに乗せて人に届けられるべきかということを考える必要があるでしょう。

例えば知識取得の手段をゲームとして捉えると、これまでは自分の外に本をいくつ積み上げるかというゲームだったのが、今ではネットワーク内の膨大な情報から何を切り出していくべきか、というゲームに変わってしまった。その時に「お前ら、ちゃんと本を読め。」というのはあまりに無意味です。そうではなく、かつて本が担っていた機能を更新させる方法を考えないといけない。

極端な話、生まれた時からネットワークにつながっている人間が多数派となり、彼らが吐き出した言葉がネット上に自動的に集積されていく環境が所与のものとなったとしたら、集積された情報にアクセスするための検索ツールさえあればよい、という状態も十二分に想定しうる。今まで書き言葉とは基本的に自分の外側にある特別なもので、それを本というパッケージングされたものを通して摂取してきた。そのため、それを積み上げることが教養を得ることであり、成長だと考えられてきたわけです。しかし今の僕たちは既に、言葉や教養、知識体系などさまざまな情報ネットワークに接続されているため、個々の情報をどこで区切るかのほうが問題になっている。つまり、これまでの人間と情報の関係がほぼ逆転していることになるのです。

それにしても『おじいさんのランプ』の主人公が始めた本屋はまだ残っているのでしょうか。このおじいさんが自分の体験を語って聞かせた孫は今八十歳くらいになっている計算になりますが、彼が思い余ってネット書店の倉庫に火を付けに行ったりしていないだろうか、僕はとても心配です。たぶんそんな時に限って彼の車のカーナビは故障してしまうのだと思います。彼はしかたなくコンビニで紙の地図を買ってきて、狭い車内で広げる。暗い車内で老眼を酷使しながら、必死に現在位置がどこかを探ることになる。そしてきっとこうつぶやくのです。「紙のような古いものはいざという時に役に立たない。」と。

比較評論Ｂ　読み書きする身体

港　千尋

これまで私たちが親しんできた、モノとしての本の属性が失われようとしている。電子化された本にパルプはいらない。しかし、電気がなければ存在しないも同じである。インターネット上で公開されている文書も光ディスクのようなパッケージ化されたものにも、本が持っていた「厚み」がない。果たして「厚み」や指先で触る紙の「感触」といった本の属性と、書かれている内容とは全く無関係だろうか。一般的には、形態がどうあれ、問題は中身だということになるかもしれない。印刷されていようが、液晶画面で見ようが、内容は、器から独立していると考える人が多いだろう。しかし本の物質性と読書との間には、もっと深遠な関係があるかもしれない。物質と情報の間にあるもの、具体的には読書における身体性と知識の習得との関係である。物質としての形を持たない本に慣れてしまう前に、やっておかなければならないことは、まだまだあるような気がする。

読む人の身体を眺めてみよう。表紙を開け、ページをめくり、読み終えたら閉じる。印刷された本と電子の本との差異は、まず触覚にある。「開陳する」という表現や「扉」という言葉に示されるように、開いたり閉じたりする動作には、建築的な含みがあるし、「啓く」あるいは「啓示」という言葉には、書かれた言葉の宗教的な起源を見ることができる。

私たちは、電子ファイルを「開く」と言うが、実際の動作は、マウスを動かしているだけで、何かを「開いて」いるわけではない。大体マウスを握った手は、何かを開く動作とは逆の状態である。普通は手を握ったままの状態で本を読むことはできない。電子化された本の登場によって、初めて人間は、握りこぶしでページをめくれるようになったと言うべきである。更に携帯電話の登場によって、親指一本で文章を書けるようになったのだから、ここに及んで、読み書きする身体は大きく変化していると言ってよい。読書という活動が培ってきた指先や手の動作が、電子化によって、失われてゆく。紙や活字といった物質が潜在的に持っていた役割を、私たちはもはや必要としていないのだろうか。

しばらく前、ある本の冒頭で、とても印象深い「学び」の風景に出会ったことがある。『世界の再魔術化』で知られる著者モリス・バーマンが書き留めているエピソードによれば、ヘブライ語のアルファベットを習う最初の日、教師は子どもたちにそれぞれの石盤に最初の文字を蜜で書かせ、それをなめさせたという。子どもたちは、文字を学ぶ最初の瞬間に、知識は甘美なるものであることを感得する。いったい今の世界で、誰が「文字」に味があることを教えられるだろうか。文字が視覚以外の感覚を刺激するということは、無論、活字では不可能だし、まして電子テキストではありえない。「文字」を単なる伝達媒体とする考えからは、絶対に出てこないような「教育」が、かつて存在していたということである。

文字が「味覚」と直接に結び付くことは、恐らくまれなことだろう。だが触覚なら、まだ分かる。私たちはもともと文字を、常に触覚を通して学んできた。漢字文化圏には幸いにして書道が生きているし、アラブ語圏にもみごとなカリグラフィーの伝統がある。細々とではあるが、ヨーロッパにもペンとインクの伝統は残っている。例えばフランスでは、小学校でアルファベットを書き始める際に、今日でもペンとインクを子どもたちに使わせる。かの有名な写真家ロベール・ドワノーの作品に、両手をインクだらけにしながら勉強している小学生たちを活写した傑作写真集がある。これは半世紀近く昔の撮影だが、今日でもそれほど変わらないようだ。パリに駐在しているアメリカ人のジャーナリストが、フランスの小学校に通う息子が、手をインクだらけにして帰ってくるのに疑問を投げかけるエッセーを読んだことがある。インク壺はさすがに少数になり、万年筆を使わせているようだが、それでも普通に考えれば、小学校の一年生が今どき手やシャツに、インクの染みを付けている光景は、全小学校にインターネットが完備されているアメリカ合衆国の親には理解しがたいものかもしれない。

文字が意味の媒体でしかないならば、インクまみれの手やシャツは時代遅れの産物である。文字は「染み」を作るものであることを、手を汚しながら身体で理解することの重要性は、まさしくこの点にかかっている。ペン先の角度、インクの染み、筆圧、視線の集中といった、それ自体かなり複雑な諸力が組み合わさり、意識と物質との相互的作用の中から生まれ出るものが、「文字」であり「言葉」なのだ。そこをおろそかにすると、「創造」という最も重要な出発点を、子どもの時代に逃がしてしまいかねない。文字がそうであるように、それが印刷される紙や、扉表紙といった本の物理的な構造にも、同様の検討を加えてみる価値はありそうである。

文字とは有限の記号によって、無限を創出する英知である。アルファベットなら、たった数十個の文字で、文字どおり、限りないことを言い表すことができる。一冊の本に収められている言葉の数は有限だが、その読みは無限のバリエーションとなりうる。書物は物質でありながら、読んでも読んでも、決して減ることがない。そこに収められている世界には、限りない豊かさが秘められている。こういう不思議を、読書経験を通じて、子どもたちは少しずつ見いだしてゆくのだ。大人になると忘れてしまうわけだが、文字や言葉の魔術的な性質は、それを電子の媒体にも伝えていかなければならないからこそ、もう一度考えなければならないと思う。

ワークシートⅡ

「複数の観点を生かして理解を深める」

年　組　番　名前

【ジグソー活動シート】

＊異なる資料を担当した者どうしで新しい班を組んだ後、エキスパート活動で話し合った内容についてそれぞれのエキスパートが説明をする。

班 エキスパート さん	班 エキスパート さん	班 エキスパート さん	班 エキスパート さん

＊右の説明を受けて、改めて〔課題〕「本の今後の在り方についてどのように考えるか。」について話し合う。

ワークシートⅢ

「複数の観点を生かして理解を深める」

年　組　番　名前

【クロストーク準備シート】

＊クロストークのための発表原稿を作る。発表の際は、文章の棒読みにならないように注意する。

ルール　①発表は各班2分(全員話す)、班による相互評価は1分です。
②発表する際は、主張と理由を明らかにして説明しましょう。(具体例や本文の引用をいれるとグッド)
③発表の流れとして、直前の班の感想を簡潔に述べてから、自分の班の発表をします。

《発表原稿》

ワークシートⅣ

「複数の観点を生かして理解を深める」

年　組　番　名前

【クロストークシート】

＊ジグソー活動で得られた班の考えをクラスで発表する。また、他の班の発表について評価をし、それぞれの発表に対する感想・コメントを書き記す。

班	A	B	合計	内容・良かったところ
自分の班				

☆評価は、左のルーブリックを参照して行おう！

レベル／観点	5	3	1
A 論理力（内容）	主張とその理由につながりがあり、具体例や引用をいれて説明している。	主張と理由につながりがある。	主張と理由につながりがない。未完成。
B 話し方	間をとり、キーワードを大きな声で話すなど、**話し方に工夫**が見られる。	声量が**明瞭**かつ声のスピードも**適切**で聞きやすい。	声量や声のスピードは**普通**で聞き取れる。

ワークシートV

「複数の観点を生かして理解を深める」

年	組	番	名前

【自己評価シート】

3…よい　2…ふつう　1…改善するところがある

評価項目	評価
ア　学習目標を確認して授業を受けたか。	3・2・1
イ　意欲的に学習活動に参加したか。	3・2・1
ウ　自分の理解したことを、他者に伝わるように説明することができたか。	3・2・1
エ　他者の考えを受け止め、自分の考えと比較して、複数の観点から考えを深めることに役立てることができたか。	3・2・1
オ　他者との交流を通して考えを深め、自分なりにまとめたり、自分の考えがどのように変化したかを説明したりできたか。	3・2・1

◆班での活動の振り返り

エキスパート活動について	
ジグソー活動について	

◆今回の活動全体を通じての感想